

ザ
・
シ
エ
ル
タ
ー

登場人物

父 センタ 三十五歳くらい
母 サトコ 三十二、三歳くらい
娘 カノ 小学二年生くらい
祖父 センジュロー 七十歳くらい

とある家の庭の上に模擬的に作られた核戦争用シェルターの内部。
未来の家を思わせるような合理の中に、ちやぶ台が一つあって、唯一それのみが、生活臭
さをただよわせている。

センタが片手にメモを見ながら、荷物を下げて入ってきた。

センタ えーと、後は各自が必要と考えるもの。たとえば、持病のある者はその薬、あるいは枕が
かわると眠れぬ者は、愛用の枕など か。サトコ、サトコ、(と、外に向かって)

はい、という返事。

センタ 何やってんだい。台所の方はもういいのかい。

はい、という返事。

センタ じゃあねえ、枕持ってきて下さい。やっぱり眠るってことは大切だからさ。いつも使っ
てる枕にしますから、ね。

はい、という返事。

センタ おじいちゃんと、カノは何やってんの？

さあという返事。

センタ さあつて、ねえ君、ねえ、サトコ。

はいという返事。

センタ 君、いったい何やってるんだよ。さつきから、荷物を運んでるのはボクばかりじゃないか。

すい、ませんという返事。

センタ すいませんって (と、時計を見て) おいおい、もうそろそろ九時じゃないか。困るよ

時間守ってくれなくっちゃ。午前八時三十分行動を開始ってことになってんだよ。最初からレポ

ートに嘘書かなきゃならないじゃないか。たのむよ、おい、何やってんだよ。

サトコ (大きなバッグを持ちながら) ごめんなさい。はい枕。

センタ うん。何やってたんだよ。

サトコ 髪の毛がくしゃくしゃで、なかなかブラシがとおらなくって。

センタ バカだね君は、旅行に行くんじゃないんだよ。核ミサイルなんだ、戦争なんだ。ほんとに

ミサイルが飛んでくると思ってたらん、ブラシがとおるかとおらないか問題になりますか？

サトコ すいません。

センタ 考えろよ、そういうこと。

サトコ あらあなた、頭の毛、後ろんところ立ってますわよ。

センタ いや、だから、そういうことはね。もう、ほんとに何にも分かつちやいなね君は。

その大きなバッグは何？ 何が入ってんの。

サトコ 毛糸です。いけませんでした？

センタ 毛糸か まあね、それがあなたにとつてどうしても必要なものであればいいですよ。そ

りや三日もこういう場所にいれば退屈もするだろうし。

サトコ カノのセーター、冬までに幾つか編んでおかないと。約束ですから。

センタ はいはい。で、カノはどうしたの。何処に居るんだ。

サトコ お庭で土いじりしてたみたい。

センタ おじいちゃんも一緒か。

サトコ はい。

セツタ しょうがないなあ。呼んでくるから、君はもう一度食料を点検しておいてくれたまえ。

サトコ はい。 あ、あなたちよつと。(と、ブラシでセンタの後髪をとく)

センタ (ため息) だからね

サトコ すいません。でも、何か気になっちゃって。

センタ もういいもしいい。(と、出て行くこうとする)

と、カノが赤いリュックサックを背負って入って来る。

カノ お母さん、手が汚れちゃった。

サトコ あら、そう。じゃあ、こつち来て、奥の台所で洗いなさい。

カノ はい。

センタ 待て、待てよおい。奥の台所って、シエルターの水を使う気か。

サトコ すいません。

センタ シェルターの水は、貯水タンクの水なんですよ。貴重な飲み水なんですよ。家の水道のよ

うに水道局に水道管が繋がっていて、ひねれば無限に水が出てくるってわけじゃないんだ。

サトコ すいません。家の方で洗わせませす。

センタ いいよもう、時間がないから。

カノ 洗わなくてもいいの。

サトコ ハンカチでふいときなさい。(と、ふいてやる)

カノ ねえ、水道って水道局につながってるの？

サトコ ううん、ほんとは貯水池から浄水場を通過って水道に流れてるのよ。

センタ どうでもいいだろ、そんなことはこの際。

サトコ はい、きれいになったわ。

センタ カノ、おじいちゃんは？

カノ センジュローなら来ないわ。このおうちが嫌なんだって。

センタ えー、困ったなあもう。何を今さら、もう

サトコ 私、お呼びしてきましたよか。

センタ いや、君が行ったって、言うこと聞く相手じゃありません。カノ、カノちゃん。

カノ なあに。

センタ あのね、おじいちゃんに言っつて、ここへ来るようにっつて、お願いしてきて下さい。

カノ 私が行くの？

センタ だって、おじいちゃん、カノの言うことならたいてい聞いてくれるでしょ。ね、たのむよ。

ね、たのむよ。これはお父さんのお仕事なんだから。みんなそろわないと困るんだから、ね。

カノ 分かったわ。そのかわり、花火持ってきていい？

センタ 花火!?

サトコ 駄目よ花火なんて。ね、あなた、駄目でしょ。

センタ あたりまえだ。

カノ じゃあ、おじいちゃん呼びに行くのやめる。

センタ よし。分かった。じゃあ持つてきていい。でも持つてくるだけだよ。この中ではできないんだよ。

カノ うん。外でやる。

センタ ほら、早く呼んできて。

カノ はい。(出て行く)

センタ 何だいったい、花火だなんて。

サトコ すいません。おじいちゃんに買ってもらったらいいんですの。

センタ 核戦争用のシェルターの中で花火するバカがどこにいますか。

サトコ すいません。

センタ ほら、ぼんやりしないで、食料の点検でしょ。

サトコ あ、はい、そうでしたわね。

センタ コンピューターの使い方は教えたでしょ。

サトコ はい。

センタ そしたら、水と食料と、生活する時間と人数とを入力するんです。そうだったでしょ。

サトコ はい。

センタ それで、扱いにくいことや、不明な点、不便なところがあった場合はボクに報告して下さい。そういうものを元にして、ボクはレポート書くんですから。(時計を見て) ああもう九時だ。

サトコ あの、あなた。

センタ え。

サトコ このコンピューター、故障してるんじゃないでしょうか。

センタ どうして。

サトコ だって、動かないもの。

センタ どれ。

サトコ ほらね。

センタ バカ。動くじゃないか。

サトコ あら、ほんと。

センタ 電源のスイッチ入れなきゃ、動くわけないでしょ。

サトコ すいません。

センタ ほんとにもう、バカなんだから。コンピューターが何で動くと思ってるんですか。人間のよ
うにメシ食って動くと思ってるんですか。

サトコ すいません。

センタ もしメシ食ってコンピューターが動くんなら、コンピューターだってクソするはずでしょ。

コンピューターがクソしますか。この世界のどこにコンピューターのトイレがありますか。

サトコ そうですわねえ。

センタ バカ、こんなたとえ話に感心するな。

カノもどつて来る。

センタ カノ、おじいちゃんは？

カノ 来るわよ。

センタ そうか、えらいね。よくやった。

カノ お父さんとお母さんが、養老院のことを話してるよって言ったたら、来る気になったみたい。

センタ ええ！

サトコ カノちゃん、どうしてそんな嘘ついたの。ほんとにそんなこと言ったの。ねえ。

カノ うん。

サトコ あなた。

センタ うーむ。策略としてはいいところをついてるが、今後の問題を残しそうだな。

カノ 言うことかかないと養老院へつれていかれるわよって言ったたら、イチコロよ。

サトコ まあ！

センタ うーん。これはいったい小学二年生の女の子が思いついてしかるべきことばなのか。事は老人問題と娘の教育問題と、両者にわたって複雑化しつつ、問題はその全貌をあらわしてきたと言っただろう。

サトコ それもレポートにお書きになるんですか。

センタ いや、ボクのレポートは、あくまでもシエルターの実用面についてですから、家庭の問題にはふれなくていいでしょう。

サトコ おじいちゃんいらしたわ。

た、も、網片手にセンジュローが現われる

センジュロー おまたせ。

センタ おじいちゃん、何ですかそれは。

センジュロー これか。これはタモだ。見たことはないのか。

センタ タモだというくらい誰にだって分かりますよ。どうしてそんなもの持ってきたんですか。

センジュロー 必要と思われるものは持ちこんでもいいだろ。

センタ ええ、そりやそうですか、でも。

センジュロー カノととんぼ捕りに行く約束をしたもんでね。

センタ とんぼ捕り！（眼を閉じて深呼吸する）あのですね、いいですか、核戦争なんです。ミサ

イルが飛んでくるんです。

センジュロー　ほんとに飛んでくるわけじゃないだろ。

センタ　そりやそうです。あくまで架空の話です、しかし、設定としてですね、外はミサイルが飛んでるんです。それでこのシエルターに我々は逃げのびたわけなんです。そういう設定のもとにですね、ボクはレポートを書かなきゃならないんです。

センジュロー　なかなかスリリングな設定で、けっこうじゃないか。

センタ　茶化さないで下さい。丁度いい、みんなそろったところで、もう一度今回のボクの仕事について説明しますから、確認して下さい。えーこの度、我社ではせまりくる近未来的重大事、すなわち核戦争に対処すべく民間向けのシエルターを開発いたしました。それがこれです。開発　S H 一
号タイプと私どもは呼んでおりますが、この度、それを大量生産化するにあたりまして、最終的実験段階
といたしまして、実際にこのシエルターにおいて、民間人を居住せしめ、その実用について調査すべく、この
の度、

センジュロー　この度が多いな。

センタ　この　この程、えー、今回、

センジュロー　お前がその役をおおせつかったんだろ。

センタ　そうです。ボクはレポートを書かなきゃならんです。その為に、ここで三日間、みんなには、外に出ることなしに生活してもらわなければならんです。この前、説明したでしょ。これはボクにとつて大切な仕事なんです。協力して下さいよ。

カノ　母さん、ミサイルってガンダムに出てくるあれ？

サトコ　ええ、そうよ。

カノ　ミサイルが飛んでくるの？

サトコ　かも知れないのよ。

カノ 飛んできたらどうなるの？ 爆発しちやうの？

センタ 大丈夫、大丈夫なんだよカノ。

センジュロー そう大丈夫。飛んできたらこのタモでつかまえりゃいいんだ。

センタ (せきばらいして) このシエルターはね、本当は土ん中に埋めるわけ。だから大丈夫なんだよ。

センジュロー かんおけと同じだな。

センタ 壁は新開発の特殊合金ですから、熱も放射能も通しません。おまけに我社のSH 一号の特長は、パーソナルタイプのコンピュータが一台設置されていて、外部状況の分析も室温や空気の調整も何でもかんんでも人手をわずらわすことなく一切をそれがやってくれるんです。おまけにゲームだってやれるし、英語や漢字や算数の勉強だって、このコンピュータで出来るんですよ。この、どこが、かんおけですか。

センジュロー 機械つきかんおけ。

センタ いいですかお父さん、たとえこれが機械つきのかんおけだとしてもですよ、人類を破滅から救う、これは最も有効な手段、現実的方法なんです。それが、家一軒建てる四分の一くらいの費用で、月賦で買えるんですよ！

サトコ 月賦で買えるところはいいわね。

センタ そうだ月賦だ月賦だ！ しかも銀行ローン付き。

センジュロー ありがたい話だ。これで核戦争でもなきや、もとが取れない。

センタ まあいいでしょう。議論しているヒマはありません。とにかく三日間、ここで暮らしてもらいますからそのつもりで。

センジュロー 養老院よりは、ましだろう。

センタ お父さん！

サトコ あなた。

センタ 誰が働いてごはんを食べさせてると思ってんですか。それを考えれば、ボクの仕事に協力して当然でしょう。

センジュロー わしだって、お前を食わせてきてやったさ。

サトコ おじいちゃん、すいません。ここはひとつセンタさんの顔をたててやって下さいな。

カノ センジュロー、あんまり文句ばかり言うとな、口の減らねえジジイだってカゲグチたたかれるわよ。

センジュロー はいはい。

センタ それでは、入口のドアを閉めます。(と、コンピューターのキイを叩く) いいですか、外では核ミサイルが破裂してるんですよ。そのつもりで。

と、おだやかなBGMが流れてくる。

サトコ あら、音楽が。

センタ そうですね。このBGMも、当然コンピューターの計算によって、内部の入間の緊張をとき

ほぐすために、少しでもこの居住空間をくつろぎやすい場所とするために、流れているわけです。

センタ どうぞ自由に、くつろいで下さい。

センジュロー 屁でもひるか。

センタ どうぞお好きなように。

センジュロー サトコさん、ビールない？

サトコ 朝からビールですか？

センタ ビールはありません。

センジュロー つまらんな。

カノ 退屈ね。

サドコ カノちゃん、毛糸まくの手伝ってちょうだい。

カノ いや。

サトコ どうして？

カノ 肩がこるんだもの。

サトコ まあ。

センタ 勉強しなさい勉強を。

カノ 教科書もノートも置いてきちゃった。

センタ じゃあ、コンピューターでやりなさい。父さんが教えてあげるから。

カノ 花火やりたいな。

センタ 中でやっちゃいけないって、言ったでしょ。

カノ 外、行っていい？

センタ 外はミサイルが飛んでるの。

カノ じゃあ、ミサイル見に行く。

センタ バカ！

カノ つまんないの。

センジュロー カノ、センジュローとゲームやろう。

カノ 追丁九？ (おいちよかぶ)

センジュロー ああ、いいよ。

センタ お父さん！ 娘に花札なんか教えたんですか。

センジュロー ああ。

センタ カノは小学二年生ですよ。

センジュエーロー いいじゃないか。算数の勉強だよ。

カノ やろうよ、センジュエーロー。

センジュエーロー よしよし。

センタ その、センジュエーローって呼ばせるのも何とかありませんか。

センジュエーロー いけないのか。

センタ 娘が、祖父を名前で呼びすてにするなんてことは、道徳的にも、決して良いこととは思えません。第一、敬老の精神が少しもない。

センジュエーロー お前にはあるのかい敬老の精神とやらが。

センタ え

センジュエーロー カノはわしの友だちなんだ。いわばガールフレンドだ。そのガールフレンドに毎度毎度「おじいちゃん」なんて呼ばれてみる、年の差を感じてやりきれなくなる。さ、カノ、札を並べて。おまえが親だ。

カノ あいよ。さ、はってくんねえ。

センタ (ためいきする)

センジュエーロー 花札がいかんというのなら、わしは一人でビニール本見るが、どうだ？

センタ (何か言いたそうなのだが)

サトコ あなた、毛糸まき、手伝って下さる？

センタ (仕方なくそうする) この不良じい。

センジュエーロー 何か言った？

センタ いいえ。別に！

カノ やった、九(かぶ)だ。

センジューロー おみごと。

2

暗転

昼食が終わった。

サトコ はいお茶。カノちゃんはお水ね。

センタ ボクも水。

サトコ え？

センク 葉だよ。クスリ。

サトコ あ、そうか。カノちゃん、ちよつと手伝って。お茶わん台所にはこんでちようだい。

カノとサトコひっこむ。センジューローは新聞を読み、センタはつまようじを使っている。

センジューロー ちよつと暑かないかい。

センタ そんなことありませんよ。温度は自動調節されるはずですからね。

センジューロー ふん、また機械か。

センタ 機械だったってコンピュータですからね。自分で考える機械ですからね。
センジュエロー 考える機械ねえ。わしは前から、機械ってのは、考えないから機械というんだ
と思ってたがね。

サトコ来る。

サトコ いい、あなた。クロスタビン。

センタ オレの健康。

サトコ それからカルシウム。

センタ ビタミンCとEは？

サトコ はい。

センタ (飲みつつ) カノは？

サトコ お台所で水遊びしてます。

センタ (吹き出す) プハーツ。

サトコ あらあなたどうなさったの。

センタ 水遊びって君イッ 言ったら、水は貴重なんだって。

サトコ 大丈夫です。洗いものの残り水ですから。

センジュエロー サトコさんタオルくれないか。貴重な水を、わしの顔に吹きかけた者がいるもんでね。

サトコ すいません。カノちゃん、タオル持ってきてちょうだい。

タオル持ってカノ出る。

センジュエロー こっちこっち。はい、ありがとう。

サトコ あなた、少し暑くありません？

センタ 御飯食べたすぐ後だから、そう思うだけです。

センジュロー (タバコをつけようとする)

センタ お父さん、タバコは空気を汚しますから、吸いすぎに注意して下さい。

センジュロー しかし、やることはないからなあ。

センタ さて、食後の音楽でも流しますか。(コンピューターをいじる)

BGM。

センジュロー もちっと気のきいた音楽はないのかい。

センタ これが一番いいんです。食後に最も適した音楽なんです。

BGMが妙な調子になる。

サトコ あら。

カノ 変なの。

センタ お父さんが文句言うから、気を悪くしたのかな。

BGM、ますます変調し、止まる。

サトコ あなた？

カノ 止まっちゃった。

センタ 変だな。

と、今度は電灯が点滅する。
消える。暗くなる。

サトコ あなた停電したわ。まつ暗よ。何も見えないわ。
センタ そんなことは、いちいち言われなくとも分かってます。
カノ どうしたの。

センジュロー 停電だつてさ。

センタ 停電かどうか、まだ分かりません。

センジュロー だつてまつ暗じゃないか。

センタ おちついて。いいですか、コンピューターには節電回路というのがあつて、夜、消し忘れ

た電気を切る機能もあるんです。

センジュロー いまは夜かい。

センタ いいえ、昼のはずです。

センジュロー じゃあ、コンピューターの故障か。

センタ 我社のコンピューターが、故障するわけがありません。

サトコ じゃあなた、これは何なの。

センタ 今調べる。えーと、こう暗くつちや調べようにも、調べようがない
な。

カノ 電気つければ？

サトコ その電気がつかないのよ。

センタ サトコ、ハンドライトがあつたら。

サトコ はい。

センタ 持ってきて。

サトコ はい。あの、あなた。

センタ 何です。

サトコ ハンドライトってあれですわよね。

センタ あれって？

サトコ ハンドのライトだから、だって、ハンドは手でしょ。

センタ 何を言ってるんだい君は。

サトコ ですから、懐中電燈のことですわよね。

センタ あたりまえでしょ。

サトコ でも。

センタ 何なんでもう。

サトコ 停電の原因をお調べになるのにお使いになるんですよ。

センタ そうです。

サトコ 暗いから、見えないから、それで、明かるくしてでしょ。

センタ はい。

サトコ ところで私はこの真っ暗の中、どうやってハンドライトをさがせばいいんでしょう。

センタ 手さぐりで分からないんですか。

サトコ だって、私ここに入るの初めてですもの。

センタ お父さん。

センジャーロー 何だい。

センタ タバコお吸いになるでしょ。

センジャーロー ああ、お前とちがって、私はタバコが健康に悪いとは思ってないからな。

センタ 健康談議はいいんです。あの、

センジャーロー マッチが要るんだろ。

センタ そうです。その通りです。

センジュエロー 最初からそう言やいいんだ。

センタ すいません。

センジュエロー じゃあ、早く言え。

センタ え？

センジュエロー マッチをお借りできませんか、だ。

センタ む。(ムカッとした)

カノ む、だつて。

センジュエロー む、か。

センタ くつ。(こらえている)

サトコ あなた

センタ マッチを

センジュエロー はい。

センタ マッチをお借り できませんか お父さん くつ。

センジュエロー いいとも、マッチくらいお安い御用だ。いつでも言ってくれ。 ほれ。

センタ ど、どうも。

センタ行く。

センジュエロー、別のマッチをすってローソクに火をつけ、ちゃぶ台に立てる。

カノ あ、ローソクだ。

サトコ あら。

センジュエロー これでも準備はいい方なんだ。

センタ そんなバカなはずがない

サトコ ねえ、あなた

センタ 何？

サトコ 電源スイッチじゃないかしら。

センタ アホウ！

サトコ すいません。

センタ 君じゃあるまいし。

しばらくいじっているが判明しない。

センタ 変だなあ。バッテリーの方かなあ。

サトコ ねえあなた。

センタ え。

サトコ 場合が場合ですから、今日のところは中止にして、明日つからあらためてつてことにしたら、どうでしょう。

センタ それは駄目です。

サトコ でも、こんな具合じゃ。

センタ こんな具合だから駄目なんです。

サトコ どうしてですか。

センタ 入口は自動ドアになってますからね。

サトコ まさか、あなた。

センタ ええ、開きません。コンピューターが作動しないことには駄目なんです。

サトコ すると、あの、私たち

センク ここに居るしかありませんね。

サトコ い、いつまでですか。

センタ こいつが動くまでです。

サトコ ですから、それはいつ

センタ そんなこと、分かりませんよ。分かるわけがないだろ！ どうして止まったのか分からないのに。

サトコ あ、あなた。

センタ 落ち着け！ おちつくんだ。

サトコ でも。

センタ でもストライキもあるか！

サトコ だって。

センタ バッテリーの方を見てください。この電力は自家発電になってるんです。余分なことさえしなければ、二年は使えるんです。大丈夫だ。新品なんだから。故障なんてあるわけない。

ば、二年は使えるんです。大丈夫だ。新品なんだから。故障なんてあるわけない。

センタ行く。

と、り、あ、え、ず、坐、る、サ、ト、コ、

カノ お母さん。

サトコ え？

カノ 糸まき、手伝おうか。

サトコ ？

カノ 毛糸まき、やるんでしょ。

サトコ そうね

カノとサトコ、毛糸まきを始める。

トランジスタラジオを荷物から出すセンジュロー。

ラジオが歌い出す。

センタがもどって来る。

サトコ あなた、どうでした。

センタ 素人には分からない。ボクはエンジニアじゃありませんからね。よく分かり

ません。ただ外見上は少しも異常はないんです。スイッチもダイヤルもブレーカーも正常

な位置にあるんですが よく、分からない

カノ お母さん、暑い。

サトコ 気のせいよ。

カノ 息がつまるみたい。

サトコ 大丈夫よ ね、あなた。あの、

センタ え？

サトコ あの、空気は入ってくるんでしょう？

センタ 本来ならば、空気浄化装置がついていて、空気はそこを通して入ってくるんです。これには、それは取り付けられていません。

サトコ どういうことですか？

センタ つまり、不幸中の幸いというやつだ。これには単純な通気筒が一本ついてるだけなんです。

だから、空気は機械装置に関係なく入ってきます。

センジャーロー あやうく窒息死か。

センタ (頭をかかえる) いったい、どうしたんだろう。

サトコ あなた、そのうちにまた、ふっともともどもどるんじゃないかと。

センタ 気休めなんか言うな。

サトコ すいません。

ラジオが天気予報を始める。

気象概況があつて、

最後に台風ですが、マリアナ海に台風十五号が発生いたしました。中心気圧九三〇ミリバールでこのまま発達いたしますと、かなり大きな台風になるかも分かりません。いずにせよ日本に影響が開始するのは、二、三日から四、五日後になるもようです。今後台風シーズンにあたっては、充分の注意が必要です。最近台風被害も比較的少なくなりましたが、災害は忘れた頃にやってくると思しませぬ。ラジオをお聞きの皆さま、今後の台風情報をお聞きのがしのないように。それではまた、歌にまいりたいと思ひます。歌は

カノ 台風が来るの？

サトコ まだよ。まだまだ後。

センジュロー 台風が来てもここに居れば安心だな。

悩みこんでいるセンタ。

サトコ あなた、コーヒーでもいれましょうか。

インスタントコーヒーを作るサトコ。

サトコ カノはミルクにしないね。

センジュロー おい、コーヒーだ。悩んだって仕方なからう。停電なんかよくあることだ。

サトコ あなた、(とティーカップを持って立つ)

センタ いや、そこで飲みます。

ちやぶ台をかこんで家族がコーヒーを飲むの図。

ローソクがゆれて、ラジオはまだ歌っている。

センジュロー はは、ますますこりや台風だな。これで風に飛ばされた瓦が雨戸にあたる音でも

聞こえりや本格的だ。

そんな音がする。

サトコ 何でしょう。

センタ 気のせいですよ。

カノ 台風の話をしてよ。

少し間があつて、

カノ ねえ。

センジュロー うん？ うん。台風の話か そうだな。何がいいかな。ジューン台風が

いいかな。キティ台風がいいかな。それともルーシーか。

カノ キティとかルーシーって、それ台風の名前なの？

センジュロー そう。

カノ 女の子みたい。

センジュロー ああ、みんな女の名前だ。

カノ どうして？

センジュロー そりゃあ、台風ってのは女だからだ。

カノ えー、どうして女なの？

センジュロー うーん、それは この人に聞いてみなさい。(とセンタを指さす)

カノ どうしてなの？

センタ 知りませんよ そんなこと。

カノ

サトコ あの、ほら、台風って真ん中に眼があるでしょ。

カノ 眼があるの。

サトコ そうよ。中心にね、大きな穴がポツカリ開いてるの。それを台風の眼って言うの。カノ だから女なの？

サトコ え、ええ、そう。あのね、穴がね、ほら、男の人にはないその、ほら、女にはね、そのね。あのね、あの、花にはめしべとおしべってあるでしょ 困つたな。どうしましょ。

センタ アホか君は。

センジュロー 戦争が終わってまだ、まもない頃だからな。アメリカのやり方のマネをしたんだよ。あつちじゃ台風とは言わずにハリケーンと言うんだが、それにみいんな女の名前をつける。マリアだとかアニーだとか。

センク アメリカ人ってのはそういうシヤレが好きなんですよ。

センジュロー ジューン台風の時だったかな、大きな船が沈んだのは。

センタ 泳いだ話ですか。

センジュロー そう。こっちの方は小さな周航船だったが、二十人程の乗客で、やっぱり何人か死んだな。

サトコ その船に乗ってましたんですか。

センジュロー ああ乗ってた。

サトコ それでどうなされたんですか。

センジュロー 聞きたいかい？

サトコ ええ。

センタ 嵐の海を泳いで助かったという話ですよ。

サトコ 知ってらっしゃるの。

センタ 子供の頃、台風になると決まっていたからね。もう耳にタコができてますよ。

センジュロー 聞きたくないならいいよ。もうやらない。

サトコ あら。

カノ 台風の話をしてよ。

知らぬ顔のセンジュロー。

サトコ (仕方なく) え、そうねえ。

サトコ お母さんね、子供の頃、丁度カノちゃんくらいの頃よ、木が倒れるのを見たわ。窓をね、少し開けて外をのぞいたの。ほんとに台風の際は窓なんか開けちゃいけないのよ。風が入ってくると、その力でお家が倒れたりするからよ。でも、お家は戸板やらベニヤ板やらでふさがれちゃって、外のように少しも分からないのよね。それでお母さん、外が見たくって、一つだけそのままにしてあつたスリガラスの窓を少しだけ内緒で開けて外を見たの。すごい風だったわ。木の葉どころか、木の枝が飛んでるの。瓦も、それから、何だかわけの分からないものも、みいんな池の中を泳いでいるお魚のように、ヒューヒューヒューッと飛んでるの。お空がね、雲が飛んでるんだけど、そういうふうには見えなくて、お空全体が動いているみたいなの。

嵐の音。

サトコ 窓のまん前にプラタナスの木が一本あつたのよ。そのプラタナスの木が嵐にうたれて今にも地面からぬけてしまいそうに見えたの。右に傾き、左に傾き、向こうに倒れ、こちらに倒れ、まるで見えない嵐の手が、グルグル回しているみたいなの。お母さん、それをジッと見てたわ。分かるかしら、竹ボウキ。お庭の落葉をはくあの竹のボウキ。あれを反対にしてみたになつちやつてるの、プラタナスの木が。ほら、風が強い日に傘をさすと、おちよこになるじゃない、あ

れよ。枝という枝はみんな身をすくめるようにして空を向き、ブルブルと震えているの。

カノ それで倒れちゃったの？

サトコ ええ、土をえぐって根っこがとび出して、そのまま横倒しに倒れたわ。

カノ すごいわね。

センタ 木の一本や二本、すぐくはないですよ。父さんなんか、家がつぶれるところを見たんだから。

カノ お家が！

センタ 物置ですけどね。

カノ なあんだ。

センタ いや、物置だったって、大きなヤツですよ。このお部屋くらいある大きなヤツなんですから。

それにね、父さんは窓から覗いてたんじゃありませんよ。外にいたんです、外に。

サトコ 台風の中を、外に？

センタ ええ、あれはいつ頃かな、とにかく子供の頃です。台風ってのは何でもかんでも吹き飛ば

してしまいでしょ、それでね、ハハハ、今から思うとバカみたいなことなんだけど、ハハハハ。

サトコ どうなさったの。

センタ いやあ、ほんとにバカみたいなことなんです。ハハハ、よくあんなこと考えたもんだ。

サトコ 何を考えたんです？

センタ 空が飛べるんじゃないかと思ってね。というか、何ですか、あの、台風に吹き飛ばされて、

空に舞いあがれたらステキだなあと考えてね、風呂敷をマントにして、スーパーマンのような格

好をして、こっそり外へ出たんですよ。いやあ、きつと飛べると思ってたなあ。何しろ瓦やレン

ガが飛ばされていくんだから、ボクのような子供なら、軽いから飛べるんじゃないかと、そう思

ったんだなあ。ハハハ。

サトコ それで？

センタ ええ、こっそりぬけ出してね、物置の屋根に登ったんです。水中めがねをつけて、腕におもちやの時計をはめて、胸にバッヂなんかつけちゃって。へっへっへ。手袋して長グツはいて。

へっへっへ、スーパーマン。

サトコ 飛んだんですか。

センタ まさか、オズの魔法使いじゃあるまいし、飛べるわけないでしょ。しかしまあ、それなりの努力はしたというか、飛べると信じこんでその屋根から、ヒョイと足を離したんです。

サトコ そしたら？

センタ 見事に落っこちましたねえ。 いやしかし、そこでボクはあきらめたりしなかったです。

物置のつかい棒を二、三本集めて、シーソーのようなものを作ってですね、屋根の上に乗ってあつた大きな石を反動に使って何とか宙に飛び上がれないものかと考えたんです。それで、つかい棒をはずして、屋根の石を下に落として、さあ、シーソーを作るぞ、と思ったその時です。突然物置が音をたてて、ペシャンコにくずれたんです。台風の力というのはスゴイもんです。

センジャーロー そうか、そうだったのか。あの台風の時はどうして、あの物置だけが倒れたのか、よく分からなかったが、そういうことだったのか、つかい棒ははずしたのはお前か。

センタ 今にして思うと、そうだったのかも知れませんが、ハハハ

センジャーロー 何がハハハだ。あの台風の後にもう一つ大きな台風が来て、ななめ向かいのスズキさんの家が倒れたが、あれもお前のせいだな。

センタ ええ、あの時もつかい棒をはずしましたね。何しろ、つかい棒をはずすと、建物なんかモロイものだったてことを物置で学習しましたから、今度は空を飛ぶことより、そっちの方が面白くって。ハハハ。

センジャーロー 何てやつだ。

センタ もう、すぎ去った昔のことです。

センジュロー お前と同級だったスズキさん家のキヨシ君はあの時のケガがもとで、

センタ ストップ。あいつは悪人でしたから。

サトコ あなた、ほんとにそんなことなされたんですか。

センタ バーカ。冗談だよ。しかし、台風ってのは何かこう 楽しかったですね。子供の頃は。

ほんとに空を飛ばうと思いましたがね。

サトコ あのねあなた。実は私も同じようなこと考えたんですよ。

センタ へーえ。やっぱり風呂敷マントかい。

サトコ いいえ、赤いコーモリ傘でした。空にフワフワ舞いあがれるんじゃないかと思って。

センタ なる程、で、傘だけが風に飛ばされた。

サトコ。ええ、そうなんです。でも、灰色の雲の中に、私の赤いコーモリ傘がすいこまれるように

飛んでいった時は、とても、感動しましたわ。まるで私自身が飛んだような、そんな感じ。

センタ 絵になるじゃないか。

センジュロー 意外と詩人だなあアンタ。

サトコ ええ、私、そのことを作文に書いたんです。国語の授業で台風のことを作文にする課題が

出たものだから。

センタ ほめられたでしょう。

サトコ いえ、しかられました。

センタ え、どうしてですか。

サトコ 家を壊されたり、身内の者をなくしたりしている人が多勢いる時に、台風を美化するよう

な作文なんて、なんたることかって。もっと台風の恐ろしさを書かなきゃ駄目だって。

センタ でも、台風ってのは確かにスペクタクルなんですよね。映画を見てるわけじゃなくて、ほ

んとうに眼の前で、家は倒れる、大水で木は流される。電線があちこちでちぎれて、スパークす

る。そうすると、世界が一瞬まっ青になる。それが何度も続く。ボクは震えましたねえ。恐怖じ

やないんです。何かしら得体の知れないコーフンという奴です。そのうち、停電して、今と同じ、ローソクが一本だけちやぶ台の上に置かれて家中をそいつが照らしている。ラジオが小さく鳴っていて、時々台風の情報が入る。どこどこでは床下に浸水した。どこどこでは船が沈んだ。それを聞きながら家族がちやぶ台のまわりに何をするでもなく坐っている。リュックサックと長グツと、かたわらに置いてね。外は嵐。家の中はローソクがチロチロと燃えている。そうすると、話題が無いもんだからしげんに話が台風の話になる。昔あった大きな台風の話。

サトコ　ねえお父さん。さっきの海を泳いだ話、聞かせて下さいな。

センジュロー　そうねえ。

センタ　かまいませんよ。サトコやカノは初めてなんだから。

センジュロー　うん。そうだな　私の乗ってた船は何てったかな、

センク　かもめ丸。

センジュロー　その便が最終で、台風の方は近づいてはいたが、足が遅いから大丈夫だろうという事だった。ところが目的地に着く一時間程前から、急に船が揺れだしてな。台風の速度が早まったんだ。何しろ台風とはいえ自然の一部だ。言ってみれば生きもののようなものだ。急に走り出すこともある。船はあつという間に暴風雨に襲われた。そう、嵐の中の木の葉のような感じだ。まるで遊園地のビックリハウスにいるのと同じ。立ってりや倒れる、坐れば転がる。もう船酔いなんて生やさしいことは言っていおられない。グラツと揺られてあみ棚のカバンがあつちからこつちへブウンと飛ぶんだ。逃げないと危い。そう思って何にかまつたのかよく分からないが、とにかくデツキに身をのり出すと、狂ったような海が見えた。海というやつがあんなに形を変えらるものとは、その時まで知らなかったな。もうどつちが水面でどつちが空なのか分からんだ。そりやあもう恐ろしくつてな。こりやあいかんと引き返そうとしたら、突然太い金属の棒か何かパイプと折れたような、そんな音がした。何だ今のは。そう思ったとたん、客室の方から

水がドオツと吹き出したんだ。沈む、こいつは沈むぞお
客室から乗客が次々に逃げ出して
きて海へ飛びこんだ。放り出された人もいる。

カノ センジュエローも飛びこんだの？

セツジュエロー そう。飛びこんだのはいいが、どっちに向かって泳げばいいのか見
当がつかない。とにかく、おぼれないように浮かんでるしかない。いっしょうけんめい、浮かん
でいた。なるべくじっとしていた。これが良かったんだ。しばらくすると風も雨もおさまった。

サトコ 台風行っちゃったんですか。

センタ 眼だよ。

セツジュエロー 台風の眼の中に入ったんだ。海はひと息ついて、水面の波もおだやかになった。

ほつとして、ひよいと見ると、灯が見える。ずっと向こうにボツンと灯が見えた。なんだ、港ま
であと少しの所まで来ていたんだ。それを見ると、今度は大急ぎでぬき手をきって泳ぎだした。

どれだけ泳いだろうか。死にものぐるいで、防波堤にはいあがると、また風雨が強くなってきた。
しかし、どうやら、助かったらしい。そこからは、はいずるようにして、やつとの思いで人家に
たどりついたんだ。もう、三十年、いや三十五年、昔の話だ。

サトコ ボツンと見えた灯というのは何だったんです。

セツジュエロー 防波堤に立ってた小さな灯台だったらしい。

サトコ それじゃあ、それが無ければ。

セツジュエロー 今頃お前たちも、うるさいジジイの相手をせんで、すんでるわけだ。

カノ 泳げて良かったわね。

セツジュエロー ああ。

カノ プールへ行きたいな。

サトコ もう夏は終わりのよ。

カノ でもまだ暑いわ。

サトコ そうね。

センジュウロー 夏は暑くて夏の終わりはヤケに暑い。そういうふうになってるんだ、自然というヤツはな。でもこれからはもう秋だ。

しばしの間。

カノ 台風の話はもう無いの？

センジュウロー うん？ そういえば大きなのが一つあったな。

センタ エス湾台風ですね。

センジュウロー あれはでかい台風だった。昭和何年だったっけな。

サトコ 昭和三十四年の秋でしたわ確か。

センジュウロー そうか。三十四年か。

センタ あの時床に床上浸水どころの話じゃなかったですよ。一階は完全に水の中でしたからね。みんな二階へ逃げて、それでまだ水が増えてきて、とうとう天井を破って、屋根の上に逃げましたからね。

センジュウロー 水が引くまでにずいぶんかかったな。

センタ しばらくは二階に住んでましたからね。

センジュウロー イカダ作ったな。

センタ ええ。こんな太い丸太組んで。

センジュウロー ボラ釣りもやった。

センタ 屋根の上からサオ下げてね。

センジュウロー それから、マージャンだ。退屈だったからね。

センタ イカダのおむかえが来るんですよ。

センジュローロ そうだ。四軒ばかり回って、仲間を集めて、水に浮かんだ屋根をながめながらマージャンだ。あの時、九連宝燈がもう少しでできるところだったんだ。

センタ 死体が流れてきたんですよ。

センジュローロ ああ、それでペアだ。バカな死体だ。胴巻きに札束つめこんでな。二、三十万はあつたな。

サトコ まあ、どうなさったのそのお金。

センジュローロ 死体と一緒に対策本部に渡そうと思ったんだが、とりあえず、ネコババしたな。

サトコ まあ！

センジュローロ ところが札束から死んだ人間の臭いがしてな、臭くって、気味が悪いから、結局水の中にすてたよ。

間。

センタ カレーライスが食べたかったなあ。

センジュローロ 私は煙草だ。全くあの時は禁煙状態だったからな。

センタ そう言えばたきだしでカレーライスが出たんだ。あの時のカレーライスの味は忘れられないなあ。根もとから折れたプラタナスに腰かけて、ゆさゆさお尻を揺らしながら近所の子供がみんなして、スプーンくわえて そうだ、青空ですよ。あの青空 見あげるとスゴイ青空なんですよね。何というんでしょう。音ですね、音が聞こえてきそうな青空なんです。キーンという、ずつと遠くへ突きぬけるような音。キーン

センジュローロ みんな泥だらけだった。家の中も道路もみんなだ。そこであつちこつちで水道メーターを壊してな。

サトコ　メーターを？

センジュロー　ああ、台風のせいにしてしまうんだ。

サトコ　どうして壊したりなんか

センジュロー　決まってるじゃないか。水道にホースつないで、家の中の泥を洗うんだ。水道代なんてとられてたまるかってんだ。

センタ　復旧作業の続いている間は、学校も半ドンでしたからね、授業が終わるとボクたちは大急ぎで家に帰って、アンパン一つ手に持って、それから近所の高校のグラウンドに走るんです。グラウンドには野球用の大きなバックネットがあったんですが、こいつが台風のせいで倒れていてね、いわば特大のジャンブルジム。それから神社の森じゃあ大きな松の木が重なるように倒れていて、こっちは本当のジャンブル。皆んなでターザンになっちゃって、アーアー。いやあ　楽しかったなあ。

センジュロー　ところでローソクはこれ一本きりなんだが。台風のヤツはうまく通りすぎてくれるかな。

センタ　そう言えば、風の音がもうしませんね。

サトコ　あなた、今、台風の眼なんじゃ。

カノ　ねえ、今は台風なの。

センタとサトコ顔を見合わせて。

センタ　何を言ってるんだ君は。この状況は台風なんかじゃないんだ。

サトコ　すいません。何だかつかいっかかり、その気になっちゃって。

センジュロー　まったくくだ。こうむし暑いと、ほんとに台風に閉じこめられてるようだ

よ。サトコさん、お水をもらえるかな。

サトコ はい。

サトコ、台所に立つ。

センジュウロー ところで先生、このままずっと、入口のドアが開かなければ、われわれはどうなるんだい。

センタ 何とか手をうちますよ、何とか。

センジュウロー どんな手があるの？

センタ 今、考えてるんです。

センジュウロー ローソクだって、これつきりだよ。これが消えりや真つ暗になっちまうぞ。

センタ 分かってますよ。

センジュウロー 新聞はどういうふうに書くかな。

センタ 何をですか。

センジュウロー 私たちのことさ。まあ、一週間もすりや、御近所が変に思つてケイサツにでも連絡するだろうな。それで入口のドアがこじあけられて、人々が入つてみると、瀕死の家族が転がってる。瀕死ならまだいい方だな。私なんかはくたばつてしまつてるかも知れんな。そうすると、新聞の見出しはこうかな。哀れ、世界初のシエルター事故、老人一人死亡。

センタ 冗談言わないで下さい。

センジュウロー 完全犯罪だな。

センタ 完全犯罪って？

セنجューロー これで私が死ねば事故死だからな。センタ、お前、たくらんだな。
センタ 何を言い出すんですか、もう。

サトコの声。

あなたア。あなたア。

センタ 何ですか。どうしたんです。

サトコ来て、

サトコ あなた、あの、お水が、お水が漏ってるんです。

センタ ええ！ どこから？

サトコ 天井からです。

センタ 貯水タンクだ。大変だ。

センタ行く。サトコ、コップの水をセنجューローに渡す。

セنجューロー やれやれ、どうやら、これが最後の水になりそうだな。カノ、飲むかい。

カノ (首を横にふる)

カノ、そのまま寝転がる。眠いらしい。

セنجューロー もう眠いか。そうだな、お昼寝の時間だな。

サトコ、カノにタオルをかけてやる。

センジュウロー この水はとっておこう。飲むと恨まれそうだからな。

センタ、ずぶ濡れでもどつて来る。

サトコ あなた

センジュウロー 雨漏りはなおったかい。

センタ 近所のガキどものせいです。きつとこの建物がめずらしくって、屋根によじ登って遊んでるんです。それで貯水タンクをいじくったに違いありません。

センジュウロー ミサイルには強くても子供にや弱いか。

センタ あのね、これは土ん中に埋めるんです。今はとりあえず、とりあえず地上にあるだけなんです。

センジュウロー おっと、そうだった。カンオケだったなこれは。

サトコ あなた、それで水は。

センタ 止まりました。

サトコ まあ良かった。

センタ すっかり流れ出てね。

サトコ まっ！

センタ タンクの圧力が急にどうにかなったんです。それでパイプから水が漏れたんでしょう。

サトコ 水、もう、無いんですか。

センタ 台所の床に少々残ってます。

センジュウロー それと、ここにコップいっぱい。

センタ やっぱりキッチンと土の中に埋めるべきだったんです。その辺に手をぬいたのが、今回の失敗です。きつと、子供が外から何かしたんです。やっぱり土の中に埋めなきや駄目なんだ。

センジュロー おやおや、とうとう子供のせいにするのかい。

センタ 金属バットか何かで叩いたに違いない。まったく子供ってヤツは

センジュロー いくら土の中に埋めるってたって、少なくともこれは核戦争用のシェルターだろ。

バットで子供がいたずらするくらいで、変になるもんかね。

センタ いいですかお父さん、飛んて来るのはミサイルですよ。バットじゃないんです。これはミサイル用のシェルターです。金属バット用のそれじゃないんです。

センジュロー 落ち着けよセンタ。

センタ そうだ、通風口 まさかあの筒にフタなんかしてないだろうな。いや、ガキのすることだ、もしかして。お父さん、マッチ、マッチ貸して下さい。

センジュロー どうすんだい。

センタ 空気がちゃんと入ってきてるか調べるんです。

マッチをすって、通風口にかざしてみる。

サトコ 大丈夫？ あなた。

センタ ほつ 大丈夫だ。空気は入ってきている。しかし、ひよっとして、今後いたずらされるってこともある。

サトコ。

サトコ はい。

センタ 紙とエンピツ。

サトコ どうなさるの。

センタ 紙に書くんですよ。「よい子はここで遊ばない」って。それで、それをシエルターに貼りつけとくんです。

サトコ でも、

センタ でも、何です。

センジュロー 誰がどうやって外へ出るんだ。

センタ

サトコ あなた おちついて下さいな。

センタ (コップの水を見て) この水、半分飲んでいいですか。

センジュロー いいとも。私が全部飲むはずだったんだ。

センタ 四分の一だけ頂きます。(飲む)

サトコ あなたおちつけました？

センタ ああ。もう大丈夫だ。しかし、もう水もない。電気もない

センジュロー おいセンタ。

センタ え？

センジュロー あの通風口は外につながってんだろ。

センタ ええ。

センジュロー 大声で助けてくれえって言っても外には届かないかな。

センタ 吸音装置付きです。

センジュロー 何でそんな余計なもの付けたんだ。

センタ 雑音が入って来ないようにです。

センジュロー ロー そうか。こりやいよいよカンオケだな。
センタ こんなはずじゃなかったんですが。

少し間があつて、

センジュロー ロー ソクが短くなったな。
センタ 消しましょう。このさい少しでも節約しないと

ローソクが消える。

センジュロー ロー 暗いな。

誰も何も言わない。

センジュロー ロー なあセンタ。

センタ え。

センジュロー ロー いいアイデアを思いついたよ。

センタ アイデア？

センジュロー ロー ああ。

センタ 何ですのアイデアつて。

センジュロー ロー 天井に、プラネタリウムの装置を付けるんだ。電気を消すと、天井が空のようになつて星が見えるような、そんなふうなカラクリを付けるんだ。

センタ シェルターの天井にですか。

センジュロー ああ、そうだ。

センタ そんな無駄なことできませんよ。電気のムダ使いですよ。

センジュロー そうかねえ。私はいいいアイデアだと思うんだが。ほら、考えてもみるよ、最近星が見えない日が多いだろ。空気も汚れてしまったからなのか、それともネオンの光が強すぎるのか、とにかく、夜になっても星が出ないじゃないか。

センタ 都会に住んでんですから、仕方ないですよ。

センジュロー 星の見えないところに、人間は住むべきじゃないよ。

センタ カナヅチで頭でも叩いたらどうです。

センジュロー 眼から星が出るか。

センタ ええ。さあ、暗くなつたついでだから、ボクは寝ますよ。少しでも体力の消耗を防がないと。

センジュロー なあセンタ。

センタ 何ですかもう。

センジュロー 今度、トンボ捕りに行かないか。

センタ よして下さいよ。そういうことは、カノと一緒にやって下さい。

サトコ ねえあなた。

センタ 何だよ君まで。

サトコ おなかにタオルか何かあてなくて、いいですか。

センタ いいよもう

サトコ でも、

センタ うるさいなあ。いって言うてるでしょ。

サトコ スミマセン ああなた、

センタ 何ですかもう。

サトコ あのね。もし、もしですよ、ひよっとして核戦争があったとして、人々が今の私たちのようにシエルターに入って、核戦争の終わるのを待つとするでしょ。そうしたら、家族はいつたいどんな話をするんでしょうね。やっぱり台風の話でしょうか。

センタ 分かりませんよ、そんなこと 分かりませんよ

みんな眠ったあとで、これは誰かの夢。

大餓座と小熊座が舞いて見える。

カノ あっ、お星さまだ。一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ。

センタ 七つあるだろ。あれはね、大熊座。大きなくまなんだよ。

カノ くまさんなの。

センタ そう、それであっちの小さな七つの星が小熊座。小さなくまなんだ。

カノ 親子のくまなの。

センタ そう、お母さん熊とその子供のくまなんだよ。

センジュロー 何の話をしてるんだい。

センタ 星ですよ。

センジュロー ああ、ひしやく星か。

カノ ひしやくって？

暗転

センジュロー 水をまく道具さ。ああいうかつこうしてるんだ。

カノ ふーん。

センジュロー 星もいいが、どうだこれは。

カノ あ、花火。

センジュロー 花火やろう。

カノ うん。

センジュロー さあ、花火だ花火だ。ほらセンタ、お前も一本持て。

センタ はいはい。

次第に夢は遠のき、

花火だけが美しい。そしてまた闇。

3

線香花火が美しく燃える。カノが内緒で花火をしているのである。

消える。暗くなる。

センタ (クンクン) 臭い！ 何かこげてる。おい、起きろ！ サトコ。におうんだ。何か燃えてるぞ。

電気がつく。

サトコ あなた、火事ですか？

センタ (クンクン)くさいだろ。ほら、それにこの煙。

サトコ あら、ほんと。

センタ (花火の燃えかすを見つけて) これだ。これですよ。

サトコ 何ですの。

センタ 花火。線香花火だ。

カノが突っ立っているのを見て、

センタ カノ！

カノ (泣く)

センタ バカッ。

センジュロー いいじゃないか、線香花火の一本くらい。

センタ 冗談じゃありませんよ。ここを何処だと思ってるんですか。

サトコ (電気がついていのに気付いて) あなた。

センタ (怒っている) 何だ。だいたい普段のしつけが問題なんだ。

サトコ あなた。

センタ たとえシエルターでなくってもだ、子供が火遊びするなんて、なってないです。君が甘やか

すからいけないんです。

サトコ あなたってば。

センタ 女の子だと思って、甘えさせているから内緒で火遊びなんかする子供になるんですよ。分かってんですか。

サトコ あの、あなた電気が。

センタ こういう火遊びが え？

サトコ 電気、ついてるんですけど。

センタ (見る)！

サトコ あなた、これ、電気じゃありません？

センタ ゲンミツに言えば、電気によつて、電灯がついてるといふことですが。

コンピューターにかけよつてスイッチをいじくる。

コンピューターが作動する。

ドアが開いて、うす紅色の光がさしこむ。夕日である。

カノ あ、ドアが開いた。

センタ 動いた。何だか分からないけど動いた。

カノ 夕焼けだ。

センジュロー ほんとだな。外は夕焼けだ。

カノ センジュロー、とんぼ捕りに行こうよ。

センジュロー そうだな。そうするか。

サトコ お父さん。

センジュロー もう、ちょっと御免だな。線香花火の一本もできない所はもうケツコウだ。さあ、カノ、たもを持って。

カノ うん。

センジュロー 実験はお前たちだけでやればいいだろう。私はもういい。ミサイルが飛んで来れば、できるだけ 当たらぬように気をつけるさ。

サトコ 自動車じゃあるまいし。あなた

二人、出て行く。

センタ ほおっておきなさい。仕方ありません。

サトコ それで、あなた、実験の方はお続けになるんですか。

センタ 今、考えてます。どうしてコンピューターが止まったのか、調べねばなりませんし

センジュローが置いていった荷物がサトコの眼にとまる。

サトコ あら、荷物を置きっぱなし。(と、手に取る)

センタ いいよもう。どうせたいしたものが入ってないでしょう。

サトコ あら。

センタ どうしたんだ。

サトコ

センタ 何かまた変チクリンなものでも入ってたのかい。

サトコ (荷物の中味を出す)

それは風呂敷と、赤い傘である。

センタ 何だいそりや、どういうつもりなんだあのジジイ。

サトコ (風呂敷をセンタに渡して、自分は赤い傘を開いてみる)

センタ (風呂敷をひろげて) こりやあれだ。ボクが台風の時、マントの代わりにした風呂敷だ。

二人、顔を見合わして、

サトコ まさかこの傘、まさかねえ

センタ 年寄りってやつは 時々 こういう 手品のようなことをやる。

センタ、風呂敷をマントのようにはおつてみる。ちよつとふざけて、スーパーマンのよう
に双手を高くあげてみる。

センタ はい。スーパーマン。何か、バカみたいだなこりや。

と、カノとセンジュローがとんぼを追って入って来た。

センジュロー そつちだ、そつちへ行ったぞカノ。

カノ キヤツキヤツ。

センタ どうしたんですかいったい。

カノ とんぼ、とんぼよ。

センジュロー 赤とんぼだ。こっちへ逃げたんだ。あ、ほら、そこだ。

カノがたもをふり回す。あっちへ飛びこっちへ飛び、なかなかつかまりそうにない。

センタ かしてごらん。(たもを取る)

センタ、器用にとんぼをつかまえた。

カノ やった。すごい！

サトコ 上手ね、あなた。

センタ (たもからとんぼをつまみ出して、それから、宙に放してやる)

カノ あ、飛んでく。

センタ また、つかまえてあげるよ。

四人して、ドアの方向へ飛び去る赤とんぼを見送る。

と、夕焼けが一段とその色を増してくる。

サトコ あなた

センタ ああ、夕焼けだ。

センタとサトコ、ちらっとそれぞれの表情を覗くが、苦笑して、出て行く。

夕焼けがますます赤く、誰もいなくなったシエルターに差しこんでいる。
と、赤とんぼが一匹、また一匹、シエルターの中を飛び始める。
やがて無数の赤とんぼが

END